第1部

【報告】

研究班活動の中間報告

新居みどり

新居みどり　当研究班活動の中間報告を行います。私はサブコーディネーターの新居と申します。同じくサブコーディネーターの加藤丈太郎と2人で担当しております。よろしくお願いします。

私ども研究班は7人で構成しています。全員が現場の職員で、私も地域の国際センターのスタッフであり、職場の中で日々実践として仕事をしています。一方で私たちが考えている多言語・多文化の社会におけるコーディネーターやソーシャルワーカーがどこまで学術的に研究されているのか、その現状をつかむところから始めようと、まず文献研究をしました。

日本語教育分野、ソーシャルワーカーの分野、特別支援や学校教育の分野、社会教育施設の分野、そしてコーディネーター論やソーシャルワーカー論、ボランティアコーディネーター論に関して集め、その中から主要なものを読み合って、研究会のたびに担当を決めて話をしてきました。

◆ 先行研究で見るコーディネーターの専門性分析

日本語教育の場合は、例えばミクロのコーディネーターとマクロのコーディネーターという議論があるとか、ソーシャルワーカーの場合は、社会教育施設において専門性研究というのを長くされている日本福祉大学の石河久美子さんのお話の中にある多文化ソーシャルワーカーとはどういうものであるかとか、社会教育における専門性の研究はどういう過程を経てきたのかとか、そういった研究を行いました。

この研究を通して、実際に日本社会において、多言語化、多文化化の中でコーディネーター、ソーシャルワーカーという名の付いた職業がたくさんあることが分かり、それを拾い出しました。

例えば、日本語学習では、地域日本語教育指導員（コーディネーター）の育成として、社団法人国際日本語普及協会が文化庁の委託で「日本語支援コーディネーター研修」をしています。また、学校教育においては、東京都杉並区が学校教育コーディネーターを置いています。社会教育の分野においても生涯学習コーディネーターが置かれています。また、国際交流の現場においても、国際交流協会と組んだ研修とか、市民のまちづくりのコーディネーターなどが配置されています。実際に調べてみると実に多くのコーディネーター職が配置され、プログラムが動いているということが分かってきました。

この後、実際のコーディネーターの機能について検討を始めました。

現場の声を集めていく中でひとつ参考になったのが、社会福祉協議会やボランティアセンター、大学などで働くボランティアコーディネーターの全国組織である「日本ボランティアコーディネーター協会」の動きでした。こちらは長年、専門部会をつくって日本のボランティアコーディネーターの専門性研究をしており、私どもの考えている多言語・多文化の社会におけるソーシャルワーカー、コーディネーターを考える際の枠組みとして、異なる部分もあるにしろ、類似点も多く、先行的に進んでいる研究ではないかということで、協会代表理事で龍谷大学教授の筒井のり子さんをお呼びして勉強会を行いました（資料 p. 98 ～ 100 参照）。

筒井さんからは、ボランティアコーディネーターは21世紀の市民社会をつくる鍵になる仕事だということで、どうしてボランティアコーディネーターが必要になったのか、その社会的状況や1970年代後半からどういう形でボランティアコーディネーションがされてきたのか、その変遷も含めて説明していただきました。

ボランティアコーディネーション機能はどういったところで必要か、誰が担うのかということもお話をいただきました。ボランティアコーディネーションの機能は誰が担うのかということに関して、大きく3つを筒井さんは挙げています。

ひとつは、専門職としてのボランティアコーディネーターの視点。これは将来的に認定制度の必要性が課題としてあることを指摘しています。2つ目は、例えば学校教育の場や大学などで働く専門スタッフにとって不可欠になるボランティアコーディネーション機能の視点。3つ目が、地域社会におけるボランティアリ

ーダーや地域活動のリーダーなど、職ではない人々がもつボランティアコーディネーション機能が必要ではないかという視点です。ボランティアコーディネーターの専門職としての視点と、ボランティアコーディネーション機能としていろいろな人々が担うべきものという構造的なお話をいただきました。

そして、実際にボランティアコーディネーター協会でボランティアコーディネーター基本指針というものをまとめており、その一覧表（p. 91 参照）などを見せていただきながら、議論の過程やまとめられたものを拝見していきました。現在も日本ボランティアコーディネーター協会では議論が続いていて、その専門性について、①価値（姿勢、態度）②知識③スキルといったキーワードを使って研究を進めています（資料 p. 100 参照）。このような枠組みは、私たちがこれから 2 年間かけてやっていく多言語・多文化の分野においても大いに参考にできるものではないかと思いました。

◆ 研究活動視察の中で見えてきたもの

もうひとつの報告として、研究活動の中で行った「視察」について話します。文献研究や現場の課題などを学び、次に実際の現場を見るために、愛知県豊橋市の教育委員会と、京都の京都市ユースサービス協会と立命館大学、愛知県国際交流協会、静岡市国際交流協会の 5 カ所を訪れました（資料 p. 101 ～ 111 参照）。

豊橋市では多文化ソーシャルワーカーの築樋博子さんから具体的な話をうかがいました。豊橋市というのは外国にルーツを持つ子どもたちの就学が大変多い地域です。ここでは教育相談員という職業の方々が教育委員会に配置されています。この視察の中で、教育相談員の方々が学校現場や地域社会で起きてきた問題、課題、ニーズに対応して活動していく中で、自らの働く形を組織化されてきたことが分かりました。この結果、大変きめ細かな組織体がつくられ、現在も課題に対して変容している過程を知ることができました（資料 p. 106 参照）。

また、立命館大学では専門性を持った人を育てていくプログラムを既に実施しておられ、その枠組みを学びたく視察に参りました。京都には京都市ユースサービス協会という団体があり、ユースワーカーという専門職の人々が地域の青少年センターなどで働いています。このユースワーカーの人々の専門性を向上させ、専門職を育成するために、立命館大学とユースサービス協会の協働で大学院プログラムが実施されたのです。このプロフェッショナルなワーカー養成の仕組みは 06 年度から始まっており、実際の授業風景も見学させていただきました。また、担当職員の方々に、概論と演習の関係性とか、大学とどうやって連携し、協働プ

ログラムを作ることができたかなどをうかがいました。ユースワーカーが大変ポピュラーな仕事である英国では、大学院にマネジャーコースが作られユースワーカーの育成プログラムが行われています。今回、そのコースを実際に受講し卒業された職員の方から、英国のユースワーカートレーニングコースの実際のプログラムとその内容についてお話をうかがってきました。この中で印象的だったのが、専門性ともいえる4つのキースキルです（資料p. 102、103参照）。「Key skills」というのは、プロ（職人）として必要なこととそのレベルについてのことを意味します。この内容は、これからの研究会活動に参考となるものでした。

以上が、協働実践研究「山西・小山班」の研究活動の中間報告になります。